しかし…

ある福祉高級官僚 死への軌跡

年齢を重ねていくにつれ、人は「しかし」という
言葉を自分の中から失っていく。
そして、その言葉を「だけど…」という言い訳の言葉に
変えながら生きていく。
山内はそれが許せなかったのかもしれない。
「しかし」と言えなくなった53歳の自分を、
15歳の自分によって裁いてしまったのではないか。
もう一度返してくれという山内の叫びは、
自分に向けてのものだったのか。
「だけど」という時代へ向けてのものだったのか。
現実主義の時代の中で、
しかしという言葉が山内の中から消え、
時代からまたひとつ
しかしという言葉が消えた。

是枝裕和
Koreeda Hirokazu

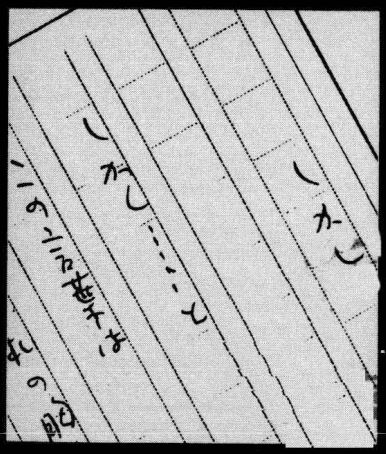
あけび書房

しかし…

ある福祉高級官僚 死への軌跡

年齢を重ねていくにつれ、人は「しかし」という言葉を自分の中から失っていく
そして、その言葉を「だけど」という言い訳の言葉に変えながら生きていく
山内はそれが許せなかったのかもしれない
「しかし」と言えなくなった55歳の自分を、
15歳の自分によって殺されてしまったのではないか
もう一度返してくれという山内の叫びは、
自分に向けてのものだったのか
「だけど」という時代へ向けてのものだったのか
現実主義の時代の中で、
しかしという言葉が山内の中から消え、
時代からまたひとつ
しかしという言葉が消えた

是枝裕和
Koreeda Hirokazu



是枝裕和（これえだ　ひろかず）

1962年　東京生まれ。
1987年　早稲田大学第一文学部文芸学科卒業。
同　年　番組制作会社テレビマンユニオンに参加。
主にドキュメンタリーを中心に制作、現在に至る。
主な作品　NONFIX『しかし…―福祉切り捨ての時代に』（第28回ギャラクシー賞優秀作品賞）、『もう一つの教育――伊那小学校春組の記録』（91年度ATP賞優秀賞）、シリーズ在日コリアンを考える『日本人になりたかった…』（ギャラクシー月間賞）等。

しかし…

1992年12月5日　第1刷発行

著　者――是枝裕和
発行者――久保則之
発行所――あけび書房株式会社
東京都千代田区神田神保町2―12
☎03・3234・2571　FAX 03・3234・2609
郵便振替・東京6-40323
印刷製本――美研プリンティング㈱

© 是枝裕和

目

次

序章 遺書 …… 5
1章 記憶 …… 15
2章 救済 …… 41
3章 電話 …… 53
4章 後姿 …… 63
5章 代償 …… 95
6章 誤算 …… 115

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

7章 食卓 143
8章 不在 149
9章 帰宅 171
10章 結論 195
11章 忘却 203
終章 再会 235
あとがき 247
出典・参考文献／山内豊徳年譜

序章

遺書

1990年（平成2）12月5日午前8時30分。

環境庁長官北川石松（きたがわいしまつ）を乗せた日本航空393便は、鹿児島空港へ向けて羽田を飛び立った。北川他環境庁関係者一行の行き先は熊本県水俣市。北川は、環境庁長官としては5人目、11年ぶりに水俣病の現地視察に訪れようとしていた。

この年の9月28日、水俣病に対する国や企業の責任を問う裁判で、東京地裁から和解勧告が出された。被告である熊本県や加害者企業であるチッソが、この和解勧告を受け入れる態度を示したのに対し、国は頑なにこの勧告を拒否、患者やマスコミの非難が裁判の国側の責任者である環境庁に集中した。北川の水俣視察は、そんな裁判の経過と世論を反映する形で急拠決定されたものである。

北川をはじめとする19名の視察団は空港で鹿児島県知事、熊本県環境公害部長らの出迎えを受けた後、車で熊本へ移動。正午に水俣湾埋立地見学、午後1時35分、水俣病患者が生活している明水園を訪問。午後3時、北川が患者代表の陳情を直接受けたあと記者会見。午後7時には、細川護熙（ほそかわもりひろ）県知事との懇談というあわただしい予定が組まれていた。

12月5日午前10時。

視察団を乗せた飛行機が鹿児島空港に着陸しようとしていたちょうどその頃、東京都町田市薬師台で環境庁のひとりの官僚が自ら命を絶った。山内豊徳（やまのうちとよのり）、53歳。水俣病裁判の国側の責任者として和解拒否の弁明を続けていた企画調整局の局長であった。

山内は2階の自室で、天井の梁に電気コードを掛けて首を吊っていた。

前日まで長官の水俣視察に同行する予定だったが、12月4日昼過ぎ、「疲れているのでしばらく休みたい」と本人から役所に連絡があった。安原正事務次官と森仁美官房長が相談した結果、山内の同行を取りやめ、自宅療養ということになっていたらしい。

第一発見者は知子夫人、48歳。発見時刻は午後2時。死亡推定時刻から4時間が経過していた。

局長自殺の報を聞いた北川は、熊本での記者会見の席上、次の様に述べた。

「信じられないとの思い。御冥福をお祈りしたい。水俣病をはじめいくつもの環境問題に心を痛められていたのだと思う」

事務次官の安原は

「疲れているとは思っていた。いろいろ難しい問題を処理していたが、(動機については)思い当たることはない」と、環境庁で開かれた緊急記者会見の席上で語った。

企画調整局長は環境庁の中で事務次官に次ぐ局内ナンバー2のポストである。1990年(平成2)7月10日にこのポストに就任以来、長良川河口堰問題、石垣島新空港建設問題など、環境庁がかかえる様々な問題解決のために各省庁間の調整や根回し、政治家や大臣との折衝を行ない、庁を代表してマスコミへの対応をするのが山内の役割であった。

水俣病をめぐって東京地裁から和解勧告が出された9月28日以降、筆頭局長である山内は、和解

拒否の立場を弁明する国側の責任者として、患者やマスコミの批判の矢面に立たされた。10月に入り、熊本、福岡などの裁判所から次々と出された和解勧告への対応と、突然決定した北川長官の水俣視察の準備に追われ、自宅には帰れずに都内のビジネスホテルに宿泊したり、局長室のソファで仮眠をとるだけといった毎日が続いていた。

次期事務次官候補と言われていたエリート官僚の自殺を、翌12月6日の新聞は社会面トップで取り上げ、その原因について次のように言及した。

「水俣行政」の板ばさみ
救済策巡り心労重なる
和解拒否の批判重圧に　　「朝日新聞」

庁内調整で板挟み？　　「読売新聞」

和解勧告対応で心労？
常に批判の矢面

ひとり世論の矢面に　　「日本経済新聞」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

和解拒否の批判集中

心労重なり「死」を選ぶ

「産経新聞」

関係者は職務の疲れから発作的に自殺を図ったのではないかとみている

「毎日新聞」

環境庁関係者やマスコミの間では、過労と心労が重なった末の発作的な自殺という見方が強かった。

遺書は残されていたのだろうか。

「名刺の裏に『家族に感謝する』との走り書きがあった」と毎日新聞では報じられている。遺書についての報道は他紙もほぼ同様である。

机の上に置かれた名刺の裏に「お世話になりました」などと書かれていた。

「朝日新聞」

名刺の裏に家族あての走り書きがあり、「お世話になりました」などと書いてあった。

「日本経済新聞」

12月8日。
中野区の宝仙寺で関係者１２００人が参列する中、告別式が行なわれた。
式では高校時代の同級生が、山内の作った一篇の詩を引用しながら弔辞を読みあげた。

遠い窓

遠い窓
私の心にある遠い窓
いつかは
この窓から外を
眺めてみようと思う
いつかは
と、淋しい言葉だが
ああ遠い窓

山内君、君は高校時代につくったこの詩を愛していて、知子さんに読んで聞かせたというで

はありませんか。遠い窓というのは、若かりし頃、君の心にすんでいた憧れでしょう。はたして君は死ぬ前に遠い窓に辿りついたのだろうか。その窓から外を眺めただろうか。私はそうではなかったのではないかと思います。窓の外にあったはずの安らぎ、信頼、そういったものを発見する前に逝ってしまったような気がします。山内君、君は高級官僚として、人も羨む栄達栄進の道を歩みました。けれども官僚であると同時に純粋なひとりの人間であろうとした。そのことは君の人生をとても険しいものにしたと思います。[1]

実は、環境庁がその存在を隠したために、事件直後には全く報じられなかったが、山内は家族に宛てたものの他にもう1枚遺書を残していた。

安原次官　なんともお詫びが
できませんので

森官房長　皆様にも大へんな
迷惑をかけて

海外出張用の名刺の裏に黒のボールペンで走り書きされたこの遺書は、家族宛てのものと並べら

れ、2階の自室の机の上に置かれていた。

山内は1959年（昭和34）、厚生省に入省、以来いっかんして福祉の現場を歩いてきた。1966年（昭和41）には厚生省公害課に所属、当時、社会的に大きな問題となっていた公害行政のバイブルとも言うべき公害対策基本法の制定に尽力した。その後、埼玉県に福祉課長として出向、再び厚生省に戻った後も、障害福祉課長、社会局保護課長などを歴任した。厚生省時代には福祉に対する自らの考察をまとめた著書を出版するなど、福祉行政のスペシャリストとして知られた人物だった。1986年（昭和61）、環境庁に出向した後は、沖縄県石垣島白保の新空港建設問題、長良川河口堰建設問題、地球温暖化の問題など、開発か地域住民の生活か、といった困難な問題に取り組んでいた。

福祉、環境行政は常に企業や経済界を代弁する通産省などから強い圧力を受けることが宿命とされている。今回の水俣訴訟問題のように何日も泊まり込みで他省庁との折衝に奔走することなど、山内にとっては日常茶飯事だった。彼はその困難な役割を30年以上経験してきているベテランの官僚だったのである。

山内の死は発作的な自殺ではなかったのではないか。

もう1枚の遺書に記された「お詫び」と「迷惑」とは何を意味するのか。

山内はなぜ53年間の人生の最期に上司へのお詫びの言葉を記さなければならなかったのか。

純粋なひとりの人間であろうとした時、その人の人生を険しいものにしてしまうという「官僚」とはどんな存在なのか。

これらの疑問に対する答えは「官僚」であることに徹しきれなかった山内豊徳というひとりの人間の53年間の中に隠されている。そしてその答えを探す行為は、今、という時代にいかに福祉が存在し得るのか、そして存在し得ないのかという疑問を投げかける行為と通底している。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c